

2017 ブタペスト世界柔道選手権大会を振り返って

増地克之*

Looking back at the World Judo Championships in Budapest in 2017

MASUCHI Katsuyuki*

1. はじめに

2017年8月28日から9月3日まで、ハンガリー・ブタペストで世界柔道選手権大会が開催された。今大会は男女7階級と2020年東京オリンピックで正式種目として採用される男女混合の団体戦（女子57kg級・70kg級・70kg超級、男子73kg級・90kg級・90kg超級の6人制）を含め計7日間で実施された。参加国は126カ国728名（男子437名・女子291名）で、各国男女合わせて最大18名の出場が可能となつてから最大数の参加者であった。昨年の10月に日本女子監督を拝命し、本学出身の福見友子氏（現：JR東日本コーチ）、秋本啓之氏（現：了徳寺大学教）をはじめとする7名のコーチングスタッフと共に臨んだ、日本女子チームの戦いを中心に振り返ってみたいこととする。

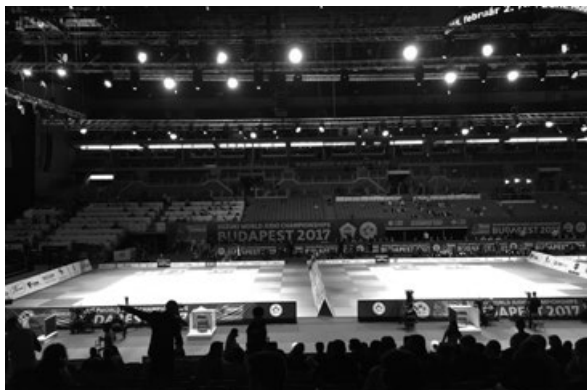


写真1 試合会場

2. 強化スケジュール

4月の最終選考会が終わってから大会までの約5ヶ月間で、国内外合わせて7回の合宿を実施した。今大会に臨むにあたり、2016年10月にコーチングスタッフが一新されたことで、コーチと代表選手は

もちろん、各所属とのコミュニケーションを構築していくことを第一に考えた。指導体制は監督である私の元で一元的に統制を図り、1～2階級ごとに担当コーチ制を取り入れた。担当する階級に関しては、ある程度コーチ達が状況に即応できるだけの権限を与え、自主的判断ができるよう心掛けた。また、合宿の内容に関しては、女子レスリングナショナルチームとの合同合宿や柔術家を招聘して寝技の講習を行うなど、競技の垣根を超えて心身ともにレベルアップを図った。2017年1月から試験導入された新ルールは、「有効」が廃止され、攻撃ポイントは「技あり」と「一本」の2つとなった。特に「合技」による「一本」の廃止や、「技あり」は複数獲得しても「一本」とはならないことへの対策として、立技から寝技への移行に着目し、「一本」を確実に獲得できるよう強化を図った。さらに、大会本番までに希望者には国際大会に出場させ、自らのランキングを上げ世界選手権でのシード権獲得を目指すとともに、実戦感覚を鈍らせないことを目的に実施した。

3. 現地での調整

日本選手団は現地での調整期間を考慮し、女子は軽量級（48kg・52kg）、中量級（57kg）、重量級（70kg・78kg・78kg超級）及び団体戦メンバーを3陣に分け、試合当日まで中4日を目安に現地入りした。世界選手権やオリンピックにおける日本選手団の調整会場は、事前視察で準備した日本選手団専用道場を使用し、選手が心置きなく試合に臨めるよう環境を整えている。また、選手のコンディション管理については、事前に確保した専用のコンドミニウムに管理栄養士を常駐させ、毎日の昼食、夕食、そして計量後のリカバリーと特に食事には重点をおいている。このように代表選手が万全のコンディションで試

* 筑波大学体育系
Faculty of Health and Sport Sciences, University of Tsukuba

合に臨むために様々なサポートを行なっている。

4. 試合

全日本女子チームは、個人と団体で金メダル3個以上、出場階級全てでメダル獲得を目標に掲げ試合に臨んだ。会場には柔道の愛好家で知られるロシアのプーチン大統領とモンゴル柔道連盟の会長で現モンゴル大統領であるバートルガ氏が観戦に訪れ大会に花を添えた。大会初日女子は、48kg級で初出場の渡名喜風南（帝京大学4年）が優勝、リオデジャネイロ・オリンピック銅メダリストの近藤亜美（三井住友海上火災）が3位であった。出場した2名がともにメダルを獲得し、日本女子チームとしては幸先のいいスタートをきる事ができた。大会二日目の52kg級では、ともに初出場となる志々目愛（了徳寺学園）と角田夏美（了徳寺学園）との決勝戦となり、志々目が見事な内股で優勝を飾った。特に準決勝戦では、リオデジャネイロ・オリンピック金メダリストでこの階級の絶対女王ケルメンディ（コソボ）を破るなど価値のある優勝であった。大会三日目の57kg級は、初出場の芳田司（コマツ）が順当に決勝まで勝ち上がり、決勝戦では敗れはしたものの、約10分間の死闘は観客をも魅了する素晴らしい内容の銀メダルであった。大会五日目の70kg級に出場した新井千鶴（三井住友海上火災）は、実力通りの試合内容で見事金メダルに輝いた。78kg級は、ディフェンディングチャンピオンの梅木真美（ALSOK）は連覇を逃したものの、得意の寝技を駆使して銀メダルを獲得した。同じく78kg級に出場した佐藤瑠香（コマツ）は、準決勝まで進出を果たしたが、準決勝、3位決定戦ともに敗れ悲願のメダル獲得はならなかった。大会六日目の78kg超級は全日本覇者である朝比奈沙羅（東海大学3年）が強豪

の中国人選手にあと一步のところまで敗退し、銀メダルを獲得した。大会七日目、21カ国が参戦した男女混合団体戦は、日本は総合力で優り初代王者に輝いた。今大会女子の結果は個人戦において金メダル3個、銀メダル4個、銅メダル1個、男女混合の団体戦において金メダルを獲得した。個人戦に出場した6階級全てにおいて決勝に進出を果たし、9名中8名がメダルを獲得するなど2020年の東京オリンピックに向け良いスタートを切ることができた。



写真2 女子メダリストを囲んで

5. 新ルールへの対応

2017年1月から施行された新ルールについて、本戦の4分間では「指導」の数だけでは勝敗が決しないという点が今回日本にとって有利に働いた。これまで外国人のパワフルな組手に対して、試合の前半に「指導」を与えられ、ポイントを取り返すことができず「指導」差で敗れるケースが見られた。しかし、新ルールの元では「指導」を与えられても本戦では勝敗が決しないため、選手たちも慌てることなく、技を出すことだけに集中することができたの



写真3 全日本チーム集合写真

が勝因ではないだろうか。また、今大会を振り返ると、世界選手権に向け選手達に取り組ませてきた寝技の強化が今回の成績につながったのではないかと思う。特に女子は男子と比べ瞬発力よりも柔軟性や根気強さに特徴があるため、立技で「一本」を取ることよりも、寝技の巧拙が勝敗に大きく影響を及ぼしたと分析する。今大会において日本女子選手が勝利した全 38 試合中、寝技での勝利が 19 試合という数字からも裏付ける形となった。近年、寝技の攻防にある程度時間を与える傾向があり、これからも寝技の習熟に一層努力する必要があると考える。

6. おわりに

2020 年東京オリンピックに向けて、上々のスタートを切ることができた。しかし、試合内容についてはどれも紙一重の戦いであり、どちらに勝利が転んでもおかしくない試合ばかりであった。今回の結果に満足することなく全ての面でレベルアップし、来年以降今年以上の成績を収めることができるよう、選手、コーチ、スタッフとともに強化に取り組んでいきたいと思う。

最後に全日本強化にご理解を賜り、筑波大学体育系の関係者に心から感謝を申し上げ報告とさせていただきます。